

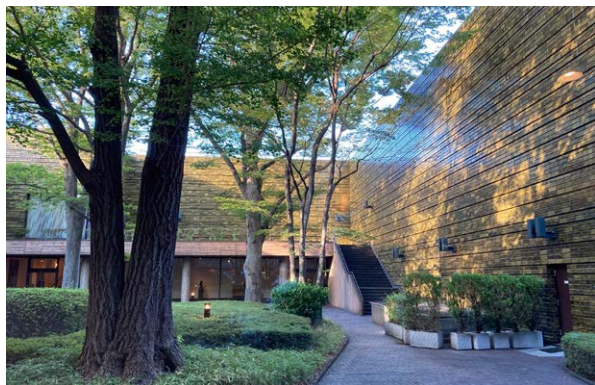
ル・コルビュジェとの対話を始めるために

国立西洋美術館本館・新館 一九五九・七九年

文・写真 松隈洋「神奈川大学建築学部教授」

二〇二三年八月二四日、国立西洋美術館に行く機会があった。東京都美術館と同じく、新規募集で四月に任用された建築ツアーを担当するボランティア・スタッフのための養成研修の講義を依頼されたからである。その間、まさかここまで長引くとは思っていなかったが、新型コロナウイルス感染状況が続いてきた。そのため、二〇二〇年十月から休館して行われていた前庭のリニューアル工事が二〇二二年四月に竣工した直後の記念

講演会ではリモート参加となつたので、改修後初めての訪問となる。この前庭のリニューアルは、二〇一六年のユネスコの世界文化遺産登録の際に、後年に施された緑地帯などにより、ル・コルビュジェの設計意図の一部が失われている、との指摘を受けたことから、一九五九年開館当初の姿を可能な限り復元することを目的に施されたのだという。訪れると、生け垣によって視線が遮られていた前庭が一望できるように



中庭越しに見る国立西洋美術館新館



国立西洋美術館本館の南側正面外観

なり、対面の東京文化会館との空間的なつながりも回復された。そのことは、西洋美術館のピロティから見返してみると一目瞭然だ。しかも、この前庭の改修に合わせて実施されたのだろう。これまで入館料が必要だった中央の十九世紀ホールと呼ばれる吹き抜けの展示室まで、無料ゾーンとして一般開放されたのだ。これにより、西洋美術館の一階は、前庭と同じく、すべて出入りが自由な公共空間として、誰もが行き来できるようにになったのである。建築そのものの価値がここまで尊重されて整備が進んだのも、世界文化遺産がもたらした画期的な成果だと思う。さて、二〇一六年七月に世界文化遺産登録が発表され、大きく報道される中で、ほとんど触れられずに残念に思ったのが、一九九八年の耐震改修工事で採用された我が国で初めてとなる免震構法である。おそらく、この時に免震構法が採用されていなかったら、西洋美術館のオリジナルの状態は維持できず、世界遺産への道筋は拓かれなかったに違いない。というのも、この免震により、大きな特徴であるピロティや十九世紀ホールに立つコンクリート打放しの丸柱は原形を保つことができ、型枠の木目の転写した精緻な仕上げは損なわれずに済んだからだ。偶然にも、筆者は、この免震構法の発案者であり、後の二〇一五年に、丹下健三の香川県庁舎の保存・耐震化検討会議でも会長を務め、同じく免震による耐震化を提言した構造学者の岡田恒男（一九三六年〜）東京大学名誉教授に、同会議の委員を務めた立場から、二〇一七年、その経緯を聞く機会があった。インタビュー

の中で、次のように証言している。「耐震改修の検討委員会が建設省に発足したのですが、メンバーは、鈴木博之、藤木忠善、阪田誠造、田中清雄、高階秀爾という顔ぶれを加えたということは、「普通の補強をするわけではない」と宣言しているようなものだと受け止め、私が委員長を引き受けました。検討の下準備として、（中略）柱を太くするか、耐震壁を設けるといふ案も検討しましたが、コルビュジェの作品にそのようなことをするわけにはいかない。（中略）そこで、当時はまだ実用化され始めたばかりの免震構造を採用する提案があったのです。」（特別記事「岡田恒男建築物の改修と保存の意義残されるべき建築物を設計せよ」『建築技術』二〇一七年四月号）。

『建築雑誌』一九五五年十二月号）によれば、ル・コルビュジェは、奈良の正倉院の「木の肌」や、前川事務所の柱と梁の「打放しコンクリートの仕上げぶり」に「感激」したという。こうして、現場の段階で日本側から提案されたのだろう。緻密で均一な肌目を持つ姫小松の木製型枠を用いた精緻なコンクリート打放しの仕上げが施されたのだ。そして、現場から届いた写真を見たル・コルビュジェは、自らの『作品集第七巻』に、ピロティの丸柱と梁の写真を選択して大きく掲載し、「その質のよさは、日本人独特の完全な工作の腕と、素晴らしい職人的良心のたまものだ」と絶賛したのである。だが、こうして免震による建築的な価値が守られたにもかかわらず、なぜか、同時に施工された前庭地下の企画展示館増築という大規模な建設工事の中で見落とされたのか、本館の外壁の青石を埋め込んだオリジナルのプレキャスト板は、すべて廃棄されてしまったのだ。当時、筆者は、設計チームの傍らで本館の歴史的な経緯の調査を担当し、大部の資料集を作成していた。けれども、それはまったく活用されず、このような事態に遭遇し、愕然として悔やんだ。それから四半世紀の時が流れた。独学で建築を学び、建築によって社会変革を志したル・コルビュジェの最初の著書『建築をめざして』が出版されたのが一九二三年、ちょうど一〇〇年前である。本館の一階のカフェから、豊かな緑が育った中庭越しに前川の新館を眺めるとき、今回の前庭のリニューアル等によって、ル・コルビュジェとの対話を始められる環境が整ったのだと思えた。